

大学教育支援プロジェクトと徳島大学



青野 敏博

(徳島大学長)

平成一五年三月に出された中央教育審議会答申の中で、二二世紀を切り拓く心豊かでたくましい日本人を育成するための教育が目指す目標の一つとして「知」の世紀をリードする創造性に富んだ人間の育成が謳われている。

このような状況の下で、文部科学省では研究面での「二二世紀COEプログラム」に加えて平成一五年度からは教育面での大学の意欲的な取組を選び、資金を重点配分する新規事業「特色ある大学教育支援プログラム(特色GP)」を設けた。平成一六年度からはさらに「現代的教育ニーズ取組支援プログラム(現代GP)」を教種の項目別に公募するようになった。これらの事業の特徴は大学教育改革への種々の取組の中から、国公立大学を通じて競争的な環境の下で、ユニークな優れたプロジェクトを選定する点にある。

徳島大学では、毎年これらの教育支援プログラム(GP)に積極的に応募し、平成一五年度から平成一七年度にかけて、合計四つのプロジェクトについて文部科学省の採択を受けたので、その内容を紹介する。

一 進取の気風を育む創造性教育の推進

平成一五年度に工学部より特色GPに申請した「進取の気風を育む創造性教育の推進」(担当…英崇夫教授)が

六二八校中七六校(二二・一%)の一つに採択された。徳島大学は教育の理念として進取の気風を育む人材の育成を掲げている。この理念を達成するために、従来の画一教育、受け身教育、知識偏重教育、マスプロ教育から脱し、個性を生かす教育、自律を促す教育、知恵を生み出す教育、グループ教育に教育方法を転換しようとしている。

平成一五年には創造性教育の開発、評価、発信を目指して「創成学習開発センター」を設置し施設としてもの造り設備を備えた三階建のイノベーションプラザを開設したのもこのためである。

この取組の中心となっている創成学習とは、一人ひとりが問題を発見し、知恵と情報を総動員することにより、新しく自分自身の「解」を見出す訓練を行うことである。具体的には①学生達がグループを構成し、②もの造りのテーマを設定し、③互いに協力して設計、製作し、④成果をプレゼンテーションし、⑤目標への到達度を評価する。工学部のプログラムでは、プレゼンテーションの評価法に工夫を加え、研究内容とプレゼンテーションの技術についてそれぞれ三項目ずつの評価を行い、卒業研究審査会まで経時的に追跡する方式を取っている。また得られた成果は全国に発信し、各大学との連携を強めるよう努力している。

学生が創成学習から受けた利点としては①身の周りの自然や事物を注意深く観察するようになったこと、②自ら問題を設定し、解決できることを知ったこと、③自主的に学習する意欲がわいてきたこと、④教員との心のつながりができたこと、などを挙げている。現在は「やってみたいを形にしよう」とのプロジェクトを募集し、各種の斬新なアイデアでグループ研究を進めている。

二 ユビキタス技術による新しい学習環境の創生

平成一六年度の現代GPのプログラムは社会的要請の強い政策課題に対応した六つのテーマで募集された。徳島大学では⑥「ITを活用した実践的遠隔教育(e-Learning)」に応募した工学部(取組担当者…矢野米雄学部長)の「ユビキタス技術による新しい学習環境の創生」が採択された。この部門では一〇八件の申請に対して一五件(二二・九%)が採択されたものであった。

本取組は無線LANと個人用の手のひらサイズの携帯情報端末であるPDA(Personal Digital Assistant)または携

帯電話などユビキタス・コンピュータインテグレーション技術を用いることにより真に「いつでも」手軽に講義や情報を受けることができるユビキタス(UBI)ラーニングの実現を目指したものである。これにより教員と学生間や学生同士による双方向の対話的な学びの場を実現し、学生一人ひとりのニーズに合ったきめ細やかな学習環境を提供できる。

徳島大学では平成一七年一〇月にラーニングセンターを設置し、ラーニングの企画運営、開発実施、評価、成果の公表などについて業務の推進を図っている。

ラーニングには同期型と非同期型のものがあり、同期型のラーニングは教員による講義を無線LANで配信し、大学側が用意した数万台のPDAを用いて学生が学習するものである。一方、非同期型のラーニングは、講義をビデオカメラまたはWebカメラで記録し、編集作業を経てコンテンツを作製し、適切な場所で適切な時に呼び出して学習するシステムである。現在工学部および医学部で、実施が進められている。

三 複数学位を与える国際連携大学院教育センターの創設

平成一七年度から大学教育の国際化推進プログラムの募集が始まったが、その中で「戦略的国際連携支援」に応募した。本取組は高等教育の国際競争力の強化を図るため、海外の大学等との積極的な連携を目指したプロジェクトを選び支援を行うものである。

工学部の村上理一教授を担当者として申請した取組名は「複数学位を与える国際連携大学院教育の創設」で、一〇四件の申請中一五件(一四・四%)が採択され、幸いにもその中に含まれた。

この取組は、徳島大学と韓国、中国、アメリカ、ニュージーランド、フランスなどの外国連携大学が協同して、徳島大学国際連携大学院を構成し、学生と教員の相互派遣を行う。この大学院で専攻する主な分野としては、①ナノテクノロジー、②バイオ情報および③地圏環境制御が挙げられる。

博士前期、後期課程とも、学生はお互いに母校と連携大学で一〜二年間勉学し、かつ現地企業でのインターンシップを行いながら、複数の大学から学位を受けるジョイント・ディグリー制を設置しようとするものである。

これに対応して、徳島大学では国際連携教育開発センター(仮称)を設置し、教育部門では、カリキュラムの

開発、教育技法の開発、試験の方法などを検討する。一方、支援部門では、国際連携教育の実施体制を構築し、実行に移し、管理部門では情報管理、学生用カルテの管理、基金管理などを行う予定である。

国際連携大学院という新しい構想のため、総てを一気に実施に移すことは困難なので、まず徳島大学の学生をこれまでの関係の濃い大学へ派遣し、徐々に大学数および徳島大学へ迎える学生を増やすよう努めたい。

四 食品機能研究を先導する人間栄養学教育拠点

「魅力ある大学院教育」イニシアティブは、平成一七年度から始まったプログラムで、創造性豊かな若手研究者の養成を図るため、大学院における意欲的かつ独創的な研究者養成の取組に対して重点的な支援を行うものである。全国の大学から三三八件の申請があり、九七件(二八・七%)が採択された。

徳島大学から提出していた「食品機能を先導する人間栄養学教育拠点」も採択を受けることができた。本学は一九六四年に全国に先駆けて医学部に栄養学科を置き、一九六九年に大学院が設置されている。これまでに栄養学博士二〇二名を養成し、六二名の大学教授を輩出している。

その他の背景としては、研究面では二〇〇四年に医学、歯学、薬学、栄養学の統合大学院「ヘルスバイオサイエンス研究部」を設置し、二〇〇三年には医学部・歯学部附属病院に臨床試験管理センターを作り活動している。教育面では二〇〇四年に医学、歯学、薬学、栄養学合同で「統合医療教育開発センター」を設置し、社会貢献面では二〇〇三年に医学部・歯学部附属病院に食と健康増進センターを設置し、Nutrition Support Teamの活動の拠点となっている。

このような整った環境の下、大学院栄養生命科学教育部の博士後期課程に食品機能研究に特化したコースを設置し、医療栄養学の指導的研究者を養成し、EBNによる機能性食品の開発と食品の機能評価を推進することを目標に掲げている。

今後は採択されたGPについて実績を積み重ねるとともに、新しいGPの募集に対応して全国の大学のモデルとなるような提案を行っていききたい。